

【虚実の考え方と薬方 4】

(虚実から薬方を考えてみます)

虚実の観点で治療法をお話させていただきます。

まず虚に対しては、前回もお話させていただいたように補剤（ほざい）（桂枝、細辛（さいしん）、人参（にんじん）、附子（ぶし）、乾姜（かんきょう）など）、実に対しては瀉剤（しゃざい）（大黄、芒硝、麻黄、石膏（せっこう）など）を与えることが原則とされます。

瀉剤の「瀉」とは有り余っているものを除くという意味です。下剤を与えることは瀉法の一環ですが、便秘の患者さんでも、大黄や芒硝といった代表的な下剤は使えない虚証の方が結構おられます。一律に難儀な便秘症ということで、これまでも長期にわたる下剤が使用されている場合が多く、さんざん腸管が痛めつけられています。「お〜い、もう、助けてくれ〜」と叫んでいる腸管の訴えにも耳を澄まさねばなりません。

この場合は、大黄・芒硝を含まない小建中湯（しょうけんちゅうとう）や駆於血剤の加味逍遙散（かみしょうようさん）、ちょっと強いかもしれませんが桂枝茯苓丸（けいしぶくりょうがん）などを量に注意してお出ししないといけません。心したいところです。